

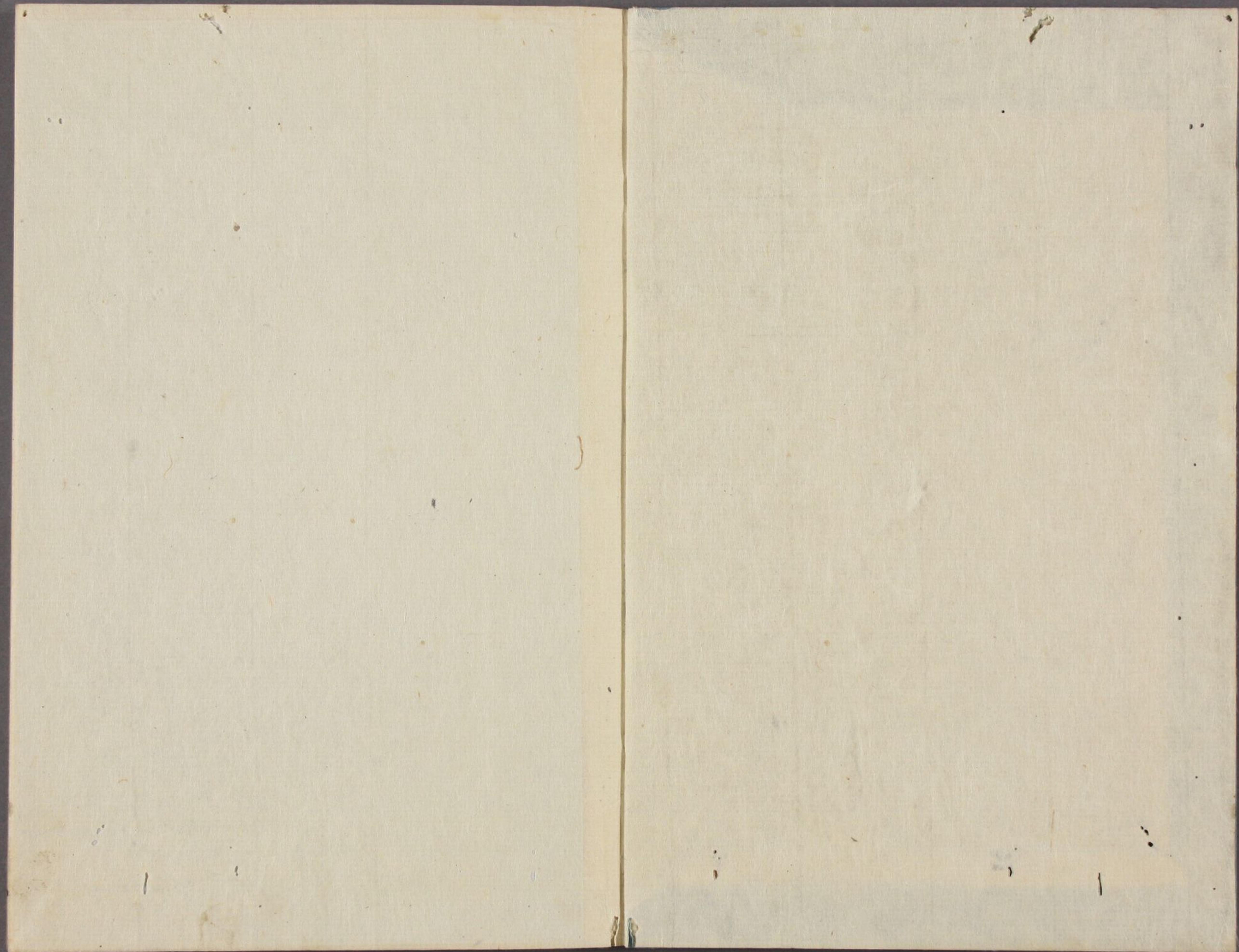
140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9





後撰和歌集卷第三新抄

春歌下

猪ち政大臣おとかきてほ。あらふきて。きこゑをまてきへる。

舞衣院太朝臣母

○伯耆郡守鈴尾源湛女なり。猪ち政大臣も。布院の時平

公小て。猪大臣の又なり。

すりやくかの舞うもむ／＼さて我身むとけのゆ／＼もあるう節

○時平、このまゝとぞよが／＼て。そこゑも。者まみかひ／＼を／＼よか

も／＼のど。今ハ猪累きいぬれど。マガ引だらうと。もとものやうにもな

きすうれとなり。

菜花物語。日暮蔓生宣  
耀敷女作

うすむしるきのけ／＼きら  
それな／＼我身むとけのあ／＼だもあ／＼耶。新古今雜上昔元一喜ハ

むのまめごと象がもとつのある事もあ。うれふども皆我方  
のまかまく累々するなり。又古今<sup>古今</sup>月やある事やむ。月  
すらぬ事がもとつたりの事かしてとひよも。此ある事もあ  
れありのやうにも。とひよをふくえまなきば。うちもきもうれあ  
れありぬ事うれ。なだ。

梅の花のかきよさせりけるが故ゆと見て。中勢よりけり。

○古ち花を瓶よさまふ。をせの信み。生花など云々方にさへ  
ふにきあはれ。大形るも小きも。いそゝ枝づくろひなども  
おもる枝のまへにさざるなり。古今<sup>古今</sup>上<sup>上</sup>云。深殿の庭のたまへ  
小花<sup>小花</sup>がきよ梅のをよせ勢をへるをみてうなる。とある御  
書。また枕草子云。わぞろひ咲く梅を。ちくぢりて。大形る

花瓶小さへなることを。まことに。ま欄の外と。小まき瓶  
の大きさにて。梅のつまづ面をき枝のみ尺をかりたる  
を。いと多くさへたまばら。おどある事て。ままかれてりよ  
り。

貫之

も。されあふからむと梅ひうきよさせをどうのうひより  
○瓶を龜<sup>カメ</sup>よきて。えへくあきよて。龜よくの瓶<sup>ヒラマツ</sup>よくねど。を  
うひよくあくよくねど。うひよくよくねど。即チある事にて。何  
をうへるなり。ほせそ下<sup>下</sup>云。風をまに吹くと花のうちれす。うづ  
うづにうけようがうきとある事回ト。

ゆ

ふ代えきかえよきせきどきうまれとぬもすのちよやひあくぬ

○ふ年とゆき名の花よきへきだよ。花もちくはとすくべ。おみま

みが花のまくまくふてもけづやとりひて。されどうそをもむ  
けつえといふをかくえうなう。せあ。雪之家兼よひふ代え  
きかくまく花ちよくおぐとくぬことひ考よやちあくぬと有  
ほの下向。とぬむとあは。ことくすすき。おきくまくとある  
らぬの写強たう。整冲は呼も。肺弱もあういれう。

歌文

よみんちくば

ぬぬ風き花のかぎりもかくたぶてひづきともなくきまくね  
○花よく花のかぎり。ことくちうぬき花なまび。喜びも。ひづ  
きともなく。喜びくさきまうあくいきまうと。肺弱いもれう。

朝光移・とねりよけすに。さうのゆゑあねぢ。ひはう  
はくす。

伊勢

はやま

○えくどうもハ。かく見てあんまうひといもんぐめ。今うそて見て  
ふ徊みせば。そんまうひといもまく。根ごえハ。上  
喜・春・じゑよまく風のこゑるふとあくま因ドく。根共ふとくよ  
ことれ。はす。家集みち。古寺門のけ納みの家の。晴よすひる。モ  
家の花のちくをそくとひや。極ごく小石をともほうぬ梅のもの  
称あぐ風のふきもとせん。うへ。梅のひくもく。我のそんと  
うもとれうあるきも人やすととてと。まそ。根ごえよく

のきくといふふあす。朝史若よとひをとひをとひなん  
う。平歴毛宇治の中君の。京ニ東院ようつろひな。  
かくぬあわひみて称ごえられふ花やことあるとある。神ふき  
も。ちのくをさなづか。よくけうきどめり。 かや根がえとひの羽  
りてのくまへる。 持梗。中勢集羽みづうきむやうと称ごえりて。女こまうきお  
どもそぞり。

女よほうぞきる

よみへし

妻の日々もき思ひを忘れ。を人の日々。あきやまくん  
○意あたう。妻の日々のゆく。ゆくよせきふく。がる。我も。のゆくも  
意あたう。あうど。と。わのくま。と。やめ。おがたうて。我を厭。と  
ふるやあんとめり。

あいあうえ  
よそふても花見る。ごとく。まきをかく。お身にうとく。妻のつまき。  
○妻吟はゆのおふ。よふ。され。くの。すなるべーと。あ。ゆく。  
1. 一音のき。妻もほくわる花のさく。時なせば。をとふること。  
ゆく。あら人のすと。思ひ出。て。おまなく。と。ひなづく。我  
ふ殊く。あら人を。ゆく。人なり。と。れを。妻の。ゆく。な。ふ。の。こつけ  
て。妻のつまき。と。ひなづく。あく。又。足す。じま。おまよ。や  
おひみう。と。自。ある。年。とき。め。の。ころ。申。および。て。た。大。店の  
あ。お。ほ。う。川。下。要。く。と。何。る。が。め。く。妻。の。因。石。よ。そ。ね。と。海。妻。か。げ  
く。く。よ。て。我。身。お。う。と。妻。い。て。る。ま。と。も。ゆ。ん。う。ま。の。ん。の。あ。集  
中に。多。い。

つゆえ

風をうすに吹ふて花のぬなす／＼んば／＼ふくわうふぐ／＼  
○花のあすな／＼ば。せきて風を吹ふたるもぢ／＼べき／＼だ。風をも吹  
とき／＼むのぬ／＼ち／＼すがうさよ／＼おき。古今事／＼風のむの  
あ／＼と／＼てふけんづ／＼やう／＼う／＼よ／＼と／＼と／＼。表裏  
な／＼ひ方／＼く。上句のてよをも。五絃半六よ。は奇。す／＼古今一ノ  
／＼な／＼よを出させても。は御／＼へ。等よぞそ／＼とおきり。つゆ乃  
をき／＼かき／＼うき／＼かき／＼。一つの格／＼く。かや／＼よ／＼とある  
なり。古今の奇／＼とい／＼。おのち／＼あんはよさうせゆ／＼くよ／＼  
き／＼。いづとも皆。こき／＼な／＼へて。るはべ／＼とあり。  
おき／＼遠隣をも。き／＼き／＼く。う／＼う／＼ろ／＼う／＼。  
あ／＼と／＼すよ／＼みは／＼女。つせ／＼よをも和え候／＼。底よゆ  
よ／＼茎の花とつ／＼。いひつけ／＼。

中の詞多いと多  
い。空網を加ふべ  
とづ子

まみ人ちうび

我あよすみと乃花の多／＼ねぢきやど／＼人やあ／＼と／＼と／＼命  
○万葉八卷の我あすみきつ／＼ふと／＼。我ぢせをが／＼／＼一相承  
ふけ／＼など／＼すもほと／＼かく我あす茎のむの多くほせば。／＼  
まめ／＼人をやゆ／＼とまめ／＼あ／＼。す／＼ね／＼男の道ひすむ  
きをしら／＼え／＼るが／＼。きや／＼ハ。まめ／＼が／＼。下／＼よ／＼雲  
のまや／＼。岑の小ね葉枝あげきや日のええぬ／＼もあり。

歌不知

山ももをもと／＼くちむを言ふやもも乃人をもも／＼  
○一首のきハ。ゆ／＼う／＼。山ももハ。み／＼すき／＼。よ／＼とハ。遠  
く離き／＼方といへて。意すあ／＼ふて。よ／＼よ／＼に見／＼など

つよも。やが遠くうけ歌をくるきなう。

あくのさうふ物とちあうねぐらぬめうおのあひてゑーき  
○おきぢ。いのさうべきぬぢとハモリ。なれあする花が。あれぢ  
ちよ高ーきふうとねり。あひてハ強なり。信ちよ多理ふとゆる  
をし。

津原ふうやま

うちもへまちまちさばうの。みけき残ものんやなふりぐら草  
○うちもへち。お延みて。まちハね毎のびくと。ゆやうかのびくきの  
を。花のふみを。いつでつそげ。げふねくらんとねり。古今美詞  
うのえのじけき春の風小あげくをのらん。

つゆ小せうまつうげ。うの女とよどむの件。橋のわのい

とかくろううけのとくとく。それとおのふみるくべよ  
やあうれど。

こそうぎみ 帰き歌玉

我君のなげきもまちもくかほよう花をくべてもうる  
又のみこのとせんやうふもありで。つゆよしの思ひのく人  
ふてなんあうけふ。

○我君ちおふなげきのとあげく。その歌とつよふをりくをむのさ  
くやうあるすハあく。まちとまちぬ。は様のむとば。何ふうく  
筋ともえりん。くづべき物とれーとう。まちぬとくよ  
小舞くとくとくとくとくとく。父性もみこの。ふきやうにと  
ありかーおきておひーめくもゆうざれぢだ。放よ。たほとぞかく  
ふかく。伊勢集よ。おうなる人の。うこふるくべくとく。花かこ

せうふ。妻まだよちくちふる君かねぎまくべま、むざにも  
かくあるをも。引合せそぞぞ。

妻の池のほとりふて。

人不知

○妻のとゆる。文まへ。渠てはよつたうべし。こそ。妻の  
ほどうみてとあるべきれり。かくふくの御ゆハ。妻くよみ  
きうて。比のうじとづくほなとばかり。

妻乃日えうきく比の渠不ハ柳のまゆぞすげもつて。ま  
○池水を絶よがづくへて。さて人の渠よ匂ひて。面をうわせり。ぐめく  
レひすくもなう。妻の匂のかげくみとつよ。比の渠のゆく澗スミ  
あさる音もほんり。柳の眉も。万葉十九キよ。ま柳の細き眉もと。  
ちくまづうう。又長恨奇よ。芙蓉如面柳如眉などむ事う。

妻のまふ。うれこゑ。花をくみける不アテ。

かくなづちくで世をやうほしてぬるのとれちもやまととそくぐく  
○花の香氣なまほづけるよせ見るやうふ。のく盛のすにて。妻乃  
あくんあぎり。阿モバムローきと。行きてかく壁なづ。手をバモさ  
ぬこと。かくなづ。手をモゼよう。と。よきなり。比アシ。うるの。で  
て。リ。て。よ。ア。ン。な。ど。の。で。と。固。く。比。の。轉。用。か。て。は。ち。の。上。ノ。句。ハ。古。今。  
桜花喜くけきる。年ども人のふ。あうきやもせぬ。といへ。奇  
の。下。句。ト。固。ド。核。の。て。よ。を。は。ち。り。と。五。弦。よ。ス。く。く。り。お。あ。く。ハ。五。弦  
に。三。十。二。絃。又。の。毛。サ。ニ。絃。六。の。毛。ス。奈。など。を。ゆ。き。る。て。ん。ね。ベ。一。

延喜時。屋上のをのこどもの中にめ。あげよきて。おのカガ

一きりけツイテ次小。

允河内駄臣

○殿上ハ。テンジヤウト。むなり。殿上のをのこと。ハ。殿上人

のりす。歎上。又。歎上人のうへ。下雜一の老  
妻サシと。古今の序にも見て。續友なると。あとまことに歎上人  
の中に石上す。そのめくすゆも。あるいはいみどくすぐれ  
たるある人など。さうやうのゆゑ小てもあらず。か  
かげども。をなどと折て。頭よりすこと。おも。あらさん  
ふ。又。せりとも。おなどと。がざーとりふら。船なり。髪きの  
畠うつたるうち。ス。うさすすりと。がざーて。かざせ  
かざせかざせかざせかざせかざせかざせかざせ  
用うなり。

かざせども。老もかくねぬ。まぢふ。乃たまくもふせ。の。薦す。なる  
○花がくを。ほよせ。裏老の形も。陽く。きぬ。古今。の。生。め。よ  
かざん。老。う。く。い。へ。ど。今ハ。我。が。裏老の。又。よく。き。薦す。も。悪。き。ぎ。れ。ど。  
る。や。と。な。く。も。か。か。ざ。れ。も。う。そ。て。花の。面。目。を。見。よ。べ。ー。と。れ。う。あり。て。ぶ。勢

ち。信。よ。面。目。失。ひ。と。う。ふ。あ。き。う。被。承。ふ。さ。う。う。ら。小。柳。の。眉。の。ひ。ろ  
あ。う。て。老。の。か。き。く。を。ふ。す。る。花。う。れ。續。ふ。載。雜。ち。き。本。ち。か。き。く。ふ  
せ。や。と。只。一。ち。や。を。づ。き。に。う。れ。ゆ。く。ら。ん。な。と。往。あ。り。ま。る。  
お。と。て。を。れ。あ。き。と。う。詞。あ。り。ち。ち。信。よ。面。目。を。ほ。ど。こ。す。と。う。ふ  
あ。り。て。今。の。か。り。て。ぶ。詔。の。反。対。な。り。仲。文。集。姫。川。の。中。ま。う。セ。さ。を  
や。う。べ。せ。よ。極。承。の。お。り。て。か。こ。ー。ハ。已  
き。の。も。ざ。せ。ん。又。桂。玲。日。記。な。ど。に。モ。リ。

歌。ち。う。ば

う。み。ん。く。文

一。と。を。う。か。さ。ね。る。事。乃。あ。は。こ。そ。ふ。く。び。お。を。そ。ん。と。た。の。ま。え  
○。ま。か。る。事。の。な。き。ゆ。ゑ。小。二。度。む。と。そ。ん。す。み。お。ま。れ。ひ。だ。い。と。事。の  
ま。り。こ。と。の。を。き。と。か。れ。る。後。檢。遺。上。つ。と。そ。ふ。か。く。ひ。も。こ。ぬ。ち。  
な。き。だ。い。と。か。く。く。ち。を。こ。そ。る。き。

花のをやふて。かきあれ。わどもあくちよことおど。やけはいで  
了。

○ちよことおど。あるよかな。おどりひげとゆふきだら。  
さて。あふても祠ちなど小ても。うこみすと。又ハ。うこの下  
おどといへる。祠と云祠の下にも。大きいかくぎにふくみ  
たるをゆ。役勢なり。坐ふて。よく味ひ見るべきなれど。

つゆま

事うれぢさくと。身手袋ぬき衣みきする。はうりがふとぞもげ。  
○ぬきまぬとち。身名のいれすが。偽をぬき衣とゆす。お家へのお  
ふ。二説えられども。いふ。あんと思ふく。又。美津清師  
縣房大人をも。いふ。で。身名のいれすと。ぬき衣とハ。よ。東歴

たゞ。なまびあどいもれうきば。もひ出る。今。今も。難き  
事ゆべ。け詞をよみたる。古。古今集にも。集にも。きりく。そ  
たとば。ことよ。身名のいれす。偽をぬき。衣とゆす。お家へのお  
引。まもなく。古今集のひをみすと。ハ。足ゆ。たる。かく  
て。一首の。身。まぐれど。身のさくと。ゆす。偽よて。さくに。あき  
よとひて。人を欺く。うと。身。あどに。よく。ぬす。うよとひて。あ  
まくに。よく。あれど。身。うと。身。ぬと。いふ。を。な。ん。か。又。も。さ  
けども。さう。ぬと。身。露名を。たそら。わどめ。もう。おきものなり  
と。ゆきなん。

つうき詠文。を。あ見  
ふむ。うける。を見  
つけ。ある。男の。お  
かこせ。うける。を。  
えうごとも。せさ  
き。うれぢ。あ。うれ  
ど。皆のうれぢと。

三ひよかこせとう  
くれど、ひつうは  
いとうけ。

○ほ詞也。主客の詞たゞひて、いとまぢけをとば。右のめく  
あすむべーとつも詮よそくうり。

主客人ちうだ

喜多あたらかうるるーふゆるアふもととけりあとのくやーさ  
○花をぢた立なぐるるーに、あもとをもぬあうとえつけらを  
て悔ーとづきを、表かて、おをうるるむうれて、思もども多と  
えおきて、今まくやーといへふなり。 喜多ハ立といもん料なり。  
ほお、六帖まで伊勢家集ニ、喜多あたらかうるるーをなきどきと  
きてける後をうねーきとあうて、家集をも、詞ももいとくかも見  
て、さていづきにしても、後とハ、ふみせすにうけていへるなり。文字  
をきの後とまじへが取り。

をとこばとやう。たのえあこさてはなきだ。

○たのえも、令頼かて、残よたのすーむるなり。

喜日ましにかうがまくはのうじどけて君ーぬまゝこきもたのす筆

○筆の本意のすでを、うじどけてといもん序なり。 うじどけても、心  
解てみて、などの因答因ト、いとうちとけてといもんがめー。君がふ  
くら底とけて我を思ひぬも。我もすよ。君がたのすーを珍ふめくに。  
たのむけんとなり。 喜日は呻云。万葉十に、喜べさく筆のうじを  
のうじやまく小さゆ。おぞめきまちを、とくじ。今のうじ。喜日まし。  
かーんぬばー。万葉のあよなずへど、喜日さくふてやあんと  
いもれまよ。すうことなくべー。

歌一ノ文

伊勢

うきひまふ身とあひうへぢちもまでも残ぬけりとあま

○我方とすとたゞひよ房とうへて、我が言にかうたらば、ぬるまでも、  
をとち我がそのなりとてそんまのととがく。ま之無。御みぢ奈と  
かのぶねともえと。づねるよいまむ、人をなきねど。

え良のみこ。薦巻朝臣のむすめすみはきと。ほをれをして、が  
の院かまびひれど。えあよことも竹ざくられど。竹すや  
一ねま。桜の枝小さくて、かのさうー小さく。おうせける。

きやうーおま

○ほドえのえ良のみこと云々。云々ことれど。除くべーと。ほら  
ゆきよそく。ほま。寛平。ほまにて。すき上室の度こと  
たう。うび薦巻朝臣の女をめして。朱雀院う。又ち亭子院など。

ほまのほよさく侍。今。ほまのほよさく侍。も勢うふあふ。え良、親王ハ名まひみち  
さうなり。さう一ハ。曹司にて。女の局をつよなり。  
花の名もむうーなどにえー人のうそばをもうけろひかりを  
○福茶の色をかくとせのやく。かくとぬふ。我が遠えー人のんを  
かきうけてなる事よとす。えー人とハ。即ち薦巻朝臣の女をさ  
てのよまく。さそほまあふて。えきば。ほ桜も。則ち女の家の樹  
などふやあん。女と共に。去年ハ見えひーをのゆくもすゆきばな  
足。

月のあり。ろかうけ。桜の美。

源さひあきら

あづむわ乃月とをふねづくちんあきくん。アズセをや

○おのあちれをまちるぬ家子がるんも。何<sup>アラ</sup>しくをしき柳の月  
巻をとくこと。おのんをも何<sup>アラ</sup>れをもあうてあらん人ふ見  
せま不<sup>アラ</sup>トなり。あちれしまるんとハ。もしくうあちれをもあうて  
あらんとゆき。人あらんとゆも回トをふて。まわす  
のうへを。あちれともをくとも。まわすにつきて。もうとよべき  
んをあうてあらんとゆき。あ集<sup>アシテ</sup>ものまづの象石の柄をこ  
そんあらん人ち尼<sup>アマ</sup>は免<sup>アマ</sup>。おのあもきをかくとゆも。まげを毛  
あらんとゆも。の感トて。出<sup>アリ</sup>。故<sup>アリ</sup>の声ふて。今の俗言ふも。あ<sup>アリ</sup>。毛  
いひもれとゆ是<sup>アリ</sup>。たゞ<sup>アリ</sup>。身<sup>アリ</sup>と見て感トて。あ<sup>アリ</sup>。えごとな  
花<sup>アリ</sup>。も是<sup>アリ</sup>。月<sup>アリ</sup>。うるなど<sup>アリ</sup>。あもきとゆも。ほあ<sup>アリ</sup>。とぞれと  
のまお<sup>アリ</sup>。とゆ。お<sup>アリ</sup>。漢文<sup>アリ</sup>。嗚呼<sup>アリ</sup>。などある。手<sup>アリ</sup>。をあく。とよむ。毛<sup>アリ</sup>  
なう。古<sup>アリ</sup>。み。所<sup>アリ</sup>。又。あや。などいへる。おも回ト。又。毛<sup>アリ</sup>。とゆも。もも<sup>アリ</sup>。  
いへる。毛<sup>アリ</sup>。うちも。うおもきの毛<sup>アリ</sup>。と回ト。又。後の毛<sup>アリ</sup>。あつまれとゆも。あ  
所<sup>アリ</sup>。毛<sup>アリ</sup>。と感<sup>アリ</sup>。する。絶<sup>アリ</sup>。回<sup>アリ</sup>。とくねり。さとほの世<sup>アリ</sup>。ふち。物<sup>アリ</sup>。毛<sup>アリ</sup>  
友<sup>アリ</sup>。字<sup>アリ</sup>。と。者<sup>アリ</sup>。使<sup>アリ</sup>。かて。そとへども。古<sup>アリ</sup>。すべて。うやうのところをも。今

キのものまくた。もと<sup>アリ</sup>葉歯などのめくとを<sup>アリ</sup>。ほよこの  
あちれとゆも。歌く声ふて。あ<sup>アリ</sup>。とぞれとのま<sup>アリ</sup>。うなぎ<sup>アリ</sup>。  
さ<sup>アリ</sup>。うなう。また。又。あちれと見る。あもきときく。あちれと見<sup>アリ</sup>。うなぎ<sup>アリ</sup>。  
ふと<sup>アリ</sup>。うなう。又。あちれと見<sup>アリ</sup>。うなう。あ<sup>アリ</sup>。うなう。感<sup>アリ</sup>。  
トて。えす。呑<sup>アリ</sup>。うなう。又。あちれと見<sup>アリ</sup>。うなう。感<sup>アリ</sup>。  
うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。  
うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。うなう。

いよも。そのらむへなく。たゞ人シテ。若葉シダ。老シタ。梅の花を。ものさかり  
かくべて見ぢやといへることある。がめし。梅の花も。花ぢねども。  
されよむ。へても。桜を。うらを。花といへて。さて又。およ感下シテ。ハ  
信ヒトシ。ハたゞ。よき事シト。のミリ。みを。ども。是も。おら。字書シテ。感シテ。動  
也。うひて。らのうごく。みを。ば。よき事シト。に。され。あ。きこと。小まき  
人の。おきて。あ。おきと。思シテ。を。皆。あられと。うふ。祠シマツ。よ。あ  
きる。文字シテ。漢文シテ。小。感鬼神シテ。と。古今集シテ。の。吉高序シテ。小。も。能書シテ。  
を。う。吉序シテ。ふ。お。が。み。作シテ。も。行シテ。と。思シテ。せ。と。か。き。く。か。ても。  
あ。られと。お。よ。感シテ。す。り。う。と。も。べ。し。大。く。と。あ。られと。り。ふ。立シテ。の  
事シテ。又。よ。め。き。う。で。お。え。あ。い。ミ。形シテ。ど。り。う。と。び。言シテ。を。ね。り。よ。か  
と。き。小。ほ。く。こと。を。な。う。き。て。人。ち。行シテ。に。ま。れ。感シテ。べき。事シト。に。あ。く。  
て。感シテ。べき。事シト。を。う。り。て。感シテ。す。り。を。も。の。あ。も。き。を。あ。と。ち。り。ふ。を。  
か。く。ば。感シテ。べき。事シト。に。あ。れ。て。も。ん。う。ご。う。ば。感シテ。こ。の。き。を。ね  
の。あ。られ。ち。う。ば。と。い。い。ん。な。き。人。と。り。ゆ。か。く。て。う。な。う。ば。感シテ。べき。こ  
こ。ろ。を。ち。う。林。だ。う。一。な。ど。經。古。大。人。の。お。の。小。様。い。う。れ。う。ば  
め。く。人。の。う。よ。も。お。見。す。る。ざ。か。も。お。見。本。草。の。う。へ。き。ま。の。事.  
き。の。け。一。き。時。山。の。あ。り。き。ア。な。ど。す。べ。て。感。ず。べき。事シト。に。あ。り。て。も。  
を。感。づ。べき。事シト。を。へ。を。こ。き。ま。く。う。り。て。あ。く。も。れ。と。感。づ。き。を。あ

の。あ。られ。を。あ。と。う。よ。な。り。垂。く  
と。玉。の。小。様。を。そ。そ。ま。き。ま。べ。し。

あ。が。の。る。ど。り。よ。家。う。り。葛。原。治。方。は。は。う。ち。け。る。  
○縣シテ井戸ハ。地名ナシ。拾芥抄シテ。井戸殿シテ。又。縣シテ井戸ハ。一。条シテ。と。う。く。枕  
草子シテ。亦ハと。小。あ。が。の。井戸。東。三。条。小。古。宋。ち。ど。も。そ。く。う。  
縣シテと。う。こ。よ。の。き。と。り。古。事。記。傳。女。九。卷。の。五。十九。より。六。十  
三。草。子。を。つ。ま。び。う。な。う。井。の。う。も。同。書。七。卷。五。十。卷。に  
裏。う。そ。く。う。す。く。正。勝。の。事。固。隨。事。に。も。つ。ま。び。う。に。記。さ。き  
う。され。ど。は。不。の。そ。地。名。又。ナ。り。て。の。う。か。ね。う。あ。が。の。う  
も。井。の。う。も。さ。も。用。あ。け。き。ば。彼  
書。ど。も。を。り。出。て。多。く。ハ。記。さ。ば。

鶴。宮。平。女。

都。人。き。て。も。も。う。か。ん。う。ち。井。な。く。ゆ。び。く。み。の。ど。の。山。ぶ。き。の。家  
○。教。人。と。い。沿。方。朝。臣。を。ま。く。そ。く。へ。る。を。説。な。り。あ。う。教。人。と。も。い。へ  
ふ。も。我。う。房。の。石。を。縣。の。井。戸。と。う。ふ。を。あ。が。う。古。今。集。難。下。の。祠。を。

小文藝。唐秀が、三河のどうかなるて、ゆづるはちゆべりと。  
いひやきうける西よりといひ。伊勢相宿四十。若あづへり人。  
馬のちむけせんとてとゆあどひ。縣のとよひ田舎といふが  
めくなれど。はるのも。今我がすふの鳥の。ゆづくとゆふまき  
にきて。きたの人を。旅人ともいへるなどべ。二句。もす  
なんとりよを。折きうつとゆふうけむなり。上。中。下。み。城衣の  
どふのかりひ本ても。きさんとある。又。固。ト。二句。もす  
げえて今やさくらん山吹の花。古今。萬葉。八。三。うきあくみで乃山吹故  
ふうり花のさかりよ。おとしのをねどのぬく。モ山の神を冠ら  
せて。うれしかひとせるなどべ。今桂の吹て。原。山吹。  
ばのす。うけよ。がそづとまかへる。うす。ゆ。物とも。引記。よ。事く。う  
す。河原とよまととも。引記。などとも。引記。よ。事く。

を見てよきアツベー。

つゆひえ。毅ちか  
尾。助信が母のあふ  
りありて後も。時  
そかよひけるよ。桜のまばらうけるをうにまかせて。本のもとふ  
を様の志のあけふ  
きうにまうりて。本  
のとやみねねだ。  
おの人のひひよ  
しる。

うみへーの文

今うりも風よアうせんさくまちこみよやにあとゆうける  
○今うりハ。をのちるをもさもいとけ。本が下小窓ハ。とすとみふ  
を見きバと見て。児の洋ようけするのをなべ。師え。今うきハ  
と云詞も。たゞの方へもうけます。今日の実のよよのいへるな  
き。風ふまうせんとりよも。花よたうはせてうにとゆうじ。只もう

なく仰よかくひきたるすめ。風をたのむにまみえもうなれ  
おなれを。モ風ふちとおなれ。今そ小風ふちの橋の手に立と方  
そあへるかほきて。呪作とよすをいもん料よかくいへるなりと  
いもねく。かくざアヌよみたるおハ。一つの轍を。たらうよえへ  
みくもものふとあらぬやうに。たゞとへの方よ、うけで。こだうふよ  
さく。たゞあらぬやうに。よみざまの一つみて。すみて左へのおよハ。全くたとへの方を  
表みて。窓のとを裏ふよ。うたとへの方の一もく。こまやうふ  
あるもある。は欽あどめく。こようふと高らぬやうに。たらう  
よみたるもすくもう。次。又たとへの上の洞と。窓の方の洞と。入交り  
たるもあ。万葉よハ。ことくせたとくと窓との洞。入交りたる事多き  
なり。形や垂くいそんよも。種のすぐと。あとども。さまでくく  
てさくべきだ。

うへ

あらうの朝臣

風すゝもゆうまかさんさう花よやひあうぬ不ちるもうかり

○風よまうせんとくを。助佐朝臣の母ひすにとくめて。とがえて。  
いうで風よもまうせん。あうでちくへうかわくとみをとひひて。  
うせんのとまかわくへうかわくとをとくとひだり。  
橋川とくとあうとまで。

○橋川ハ常陸國とハ雲夢抄。井越抄等とくとく。筑波山より流出  
ふて。橋の多き所なりと。毛利信重の古人一首抄等ふちあきども。古人も。  
あ上を橋川といひ。おみかの川と云つといへる。おみかはるく。  
そく水のまよハ風やわすんなどめや多かり。

あよきとぞおゆ

つゆき

常裁ニ山次アリアリ。

通編朝日

わづきたるかとくらもハふゆのやへの毛にもれとく御めりも  
○一首の意もかうねるかなうれど意のをめどをまつ小ふくら  
まつやうにもすゆ。そーはおまうたる女の調子でかううたる衣  
めどをみて。女のかみ行かるをうめど。ふすれてもあくド  
う。めきち二んなく。もとくふてとひまほきば。山ゆのやへまなれ  
るにもたとえじよふきのやうなり。 熱冲は師ヒ。寺位の時の事  
なまべーといむれとど。いうとあん。 もとくおとくハ信よつい  
トケ福神ヒヨジとくふかどのおなりと西明ヒツモ。 山ゆといふ毛ハ表  
黄裏青カシマシキ。かまく青。表葉カマハとば。まふゆとくふ。花き餘情  
などにもそく。

歌ノ度

立原文方

一トとアレシ。びさうぬ花。なれぢ。くらす。城人。とひ入り  
○一年の間。二度。とひさう。まび。た。二度。さく花。されど。故。う  
き。一み。人のよかく。りよ。理。た。す。と。か。 人。と。ひ。入り  
と。信。も。彼。見。り。ふ。など。い。もん。ぐ。め。く。と。う。と。が。き。り。よ。き。め。く。上  
高。小。ふ。ち。も。い。も。い。も。か。ん。ち。こ。と。あ。る。か。固。ト。一。う。と。き。と。う。と。き。ふ  
年。經。の。約。り。く。か。て。た。一。年。二。年。と。う。と。う。と。き。る。う。 お。ど。も。一。年。の。方。よ。と。い。もん。ぐ。ご。と。一。年。ふ。と  
う。た。ぐ。へ。る。な。り。

寛平ヒサヒラ。時。さう。せ。花。の。高。ひ。け。る。小。あ。の。あ。う。は。れ。れ。ど。

○橘花の妻ハセ。を。を。賞。て。詩。奇。愛。経。の。情。遊。を。と。ゆ。す。れ。ど。源。氏。  
あ。語。の。花。あ。常。花。細。語。の。月。高。な。ど。の。數。等。同。ド。高。字。ハ。音。にて。

エンとよむす。は時代のなまひなり。

名承継り歌

妻面乃色の枝すりおぐれこどかやうくぬを毛妻がゆべく青青きみのきみ毛毛子子一

○ながきこどハ流き東バなり。かわらくぬれめち。かくもの小ぬ瀬せん

とりよゑなり。歌の詞歌の詞も。小保小保よとくのとりよゑあわせ。

一首のきハ六帖六帖などとの合せ足足り。明らかに。

いづみのふよまうりけふ。うそばつふて。

○あのつゝも。あのかとうとりよゑ。真名伊勢物語。海頭うみと

書き。第第一本先よ。ふうき山里。せなかれす。あづなど小。まい

かれぬうーとあるなどふてらるべ。

人承

妻ふうきいろふもあくかなほの名お庭もみどうにこゆれ済れ  
○松の色がうめきゆとよ。住ひの庭も緑よ見えゆ。いとも深き松  
の色にも何るうれとなく。住吉の松をよ見ゆ。妻深き家とハ  
古今上古今上小小紀紀なる松の緑も妻うれぢ今一一松の色すりうるを  
うゆるなどひまふて。妻も緑の色もあくふよおなれぎ。詞  
書にち和象國和象國ふうくとよもと。ちにち住吉と何る。住ひを拵は云な  
う。わゆ玉玉の道なりと。およいへるがめ。一一住住のええハ今すす。  
ふもきうち。は住住をすす。ともふも。万葉の奇奇ふ多く住住を  
よもたる。古の字と。工の假字假字か用ひゆるなるを。ヨシと後継後継す。よ  
そえす。かうり。をひ。歌。歌。神社神社を。日日を。と。も。因因ト。されど。ふも。や。古  
く。う。の。よ。と。そ。く。う。古。今。雅。よ。す。く。い。と。海。人。も。つ。ぐ。く。も。な。う  
た。し。う。か。經。す。と。よ。み。た。も。ト。あ。か。く。ん。

女女ども。苏苏さんと。せぐふ出出て。

○女どもと、甚るんともまことゆきを、ト文字を一つ写す。  
せむまづべし。絵をハ女共とも、トひずすおきばかう。

典侍因香

出れ喜

まうれど、あそんと見よろこて、時べ乃事あくも立げき  
○お云、時べの事あくも立げれを、もそんと立ふるの事あくも立  
いそがくもおきへし。人のうつとゆき。今人のふてと。  
がーいふたすやうに思まれど、人の發起すうおきば。かくも  
いそくおきへし。一車よ、時べの事あくも立げれとあるも。かへ  
えてもくも思まれ更と、時翁もいもれど。

あひーもうけの人のえくはざうれど、ちかざかりふはう  
けくは。ちみへへへ

小豆

我をあそよにうからえきうづみ花ふつけともたちいぬう耶  
けく

○一首のきハ、万葉十<sub>ノ</sub>我<sub>ノ</sub>ひふくもあくえきうづみの落橋をス  
モアトヨ。新古今上<sub>ノ</sub>見<sub>ノ</sub>えこう<sub>ノ</sub>極きからなる我<sub>ノ</sub>落をうと記も人  
はきうふこそすれなどひ教う。妻<sub>ノ</sub>ハ、ふうといもん料のみ  
うからえを。信<sub>ノ</sub>ハ、イヤニアラウケレと<sub>ノ</sub>みをなう。うき<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>よ  
さん<sub>ノ</sub>めく姿形の見え<sub>ノ</sub>き<sub>ノ</sub>かで。さて落橋の見え<sub>ノ</sub>き<sub>ノ</sub>を歎  
き<sub>ノ</sub>く<sub>ノ</sub>よおき。もいとけく<sub>ノ</sub>よおき。即ナイヤヌ<sub>ノ</sub>よおき。下難一  
か<sub>ノ</sub>せの落のつ<sub>ノ</sub>のうげ<sub>ノ</sub>を。下<sub>ノ</sub>なと<sub>ノ</sub>おきんもく<sub>ノ</sub>こに<sub>ノ</sub>あ<sub>ノ</sub>き  
モ。とあるう詞<sub>ノ</sub>か<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>をも見合せてんねべし。女をうき<sub>ノ</sub>といひ。意  
の上<sub>ノ</sub>かてうきんなど<sub>ノ</sub>よおき。臺く<sub>ノ</sub>よおき<sub>ノ</sub>かで。美<sub>ノ</sub>かや<sub>ノ</sub>かれども。  
うき<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>よ<sub>ノ</sub>時<sub>ノ</sub>、落<sub>ノ</sub>いとけく<sub>ノ</sub>イヤ<sub>ノ</sub>からみ<sub>ノ</sub>せ。うき<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>よ<sub>ノ</sub>を。  
我を歎<sub>ノ</sub>く<sub>ノ</sub>イヤ<sub>ノ</sub>からみ<sub>ノ</sub>人のうかで。又ニク<sub>ノ</sub>イ・ニク<sub>ノ</sub>ラシイ<sub>ノ</sub>おどい  
いひと<sub>ノ</sub>ゆけ<sub>ノ</sub>。一つ<sub>ノ</sub>おつ<sub>ノ</sub>かう。又ニク<sub>ノ</sub>イ・ニク<sub>ノ</sub>ラシイ<sub>ノ</sub>おどい  
ふきにまつ<sub>ノ</sub>え。き<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>よ<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>回<sub>ノ</sub>ト<sub>ノ</sub>こ<sub>ノ</sub>れ。

角

○後撰集新抄三

源清院朝臣

〇十八

立ナラぬ事の爲をたのまねよおの所ナリヤスモ無ナム

○抄ち葉のあらうと見えどもげふ立うさんやとて、もも立ナラぬ  
なム。さうのんばクヒ、義を教まれよとたう。もも、おもむとある

くあうとのんをあえてよきるなム。といへ。 独身ア。娘が  
ゆくも思ひぬんすば、きりくありて、思が名づらをもいとさざ  
ら免ど。ゆく身アよりて、思がえを思へど、か廻りて志をハ立  
よしぬぞとひづきをよ。ふくらむなム。末句、見せをなす。上  
上ホーで、表の主ハあれど、あそびたるがゆゑなり。下主は小國の者  
する。そのあ波濱くれどとすら、いなみうへかなべーとある。な  
ども、回ト立ちて、こひを世人などの手にもとくまくうぬを  
は棄のころなどからきりくありて、いとみやびうかるいひざアな  
ア。が、おふなども、よくらをつけとる。  
並きよと只へど、おどろう一かくぢ。

つうひ詠云、山桜を  
きうて人の詩よお

山桜をよそ、おうはとて。

○山の桜をとりふをなう。あは二句小歌ぬてといへる。即チ山の

花なるを思ひせたるにもあんう。さて、必ス山の桜をなうで  
も、桜などハ大うも人の家をきが多く、桜などハ山をなうが  
多れきをべし。さてうつて、山郊公などの詠ふ。必  
も山とりふ詞は用ひなくとも、既くそへて、よ一詞ともねま  
ふなり。をせりぬく、花の名前につきて、種々のうちとき名な  
どつけて、も中の一枝を、  
山桜とよとひ是なり。

伊勢

思えよせたげて、きわら山桜をみて、ひとと思ひざるま葉

○思ふ君さんとて、きざくと見て折る君なり。されども、ころざ

みやほえへける女のいきれきとりよ不ふすみて、君のま  
ちがきやふつけだ。

○禁中に仕まらば。今ち石上よりこもるをなす。

主人あはば

神さびてあひけ。さむかすむ人ちおや。わふふをさする文  
○神さびても。向くすりてといもんがめし。我ハ古くなうて。うのうへ  
古きすよつひなうへせむ布留の里すすえば。うべそれ累て。おのと  
よども。ほ時氣すまむみやふ茶をさにもえびとなり。神さびも。万  
葉考列紀小云。佐備。こそ四くさばううふ轉カタマリ。○一つも進  
むすを須佐備。まよ佐備ともいへ。古事記。速須佐之男命。云。我  
勝云而於勝左備離天照大御神之營因阿埋其溝。云。かの命うけね  
小猪アシ。ほん努ひの進。小物を荒アシ。など。を。猪佐備といひ  
て。荒進む方アシス。○まよを万葉へ。小鈴鹿サキス。小猿サギ。左毘アヒ。也

き年のてよも。たゞ花の咲進むなり。卷十八。翁佐備勢年てよハ。老  
のく進アシせんとひよすて。想いあひ。時。らの和進アシ。すす。お同アシ。人  
すさく。よざき。おどり。よ是なり。卷四。今。十。小雪アシ。にも灼アシ。いたゞ。  
意進見乍アシ。を。らぬ。直。よあ。す。で。小。て。意進の字と。只。へ。神佐備と  
り。も。同。ド。け。毫アシ。一。ヲ。小。神長柄。神佐備世須登芳野川アシ。よ。即  
天皇の神カム。心のすさ。せさせ。す。う。なり。○二。つ。よ。も。只。神カム。  
ち。よ。ふ。を。も。神。さ。び。と。ひ。よ。け。毫アシ。耳。為。之。青。菅。山。者。云。神佐備立。  
毫アシ。今。十。小。神。さ。び。伊。駒。高。禰。な。ど。の。族。多。う。卷二。宇。真。人。佐。備。  
而。毫アシ。九。今。小。遠。寺。咩。良。何。遠。寺。咩。佐。備。周。寺。あ。ど。り。よ。も。か。の。す。さ。び。  
よ。出。て。物。の。よ。き。ア。を。よ。こ。と。も。亦。ぬ。是。一。轉。な。う。な。ら。の。中。本。よ  
を。神。備。と。の。ミ。モ。い。へ。る。も。○三。つ。小。ち。か。の。神。ぶ。と。と。す。う。ま。

朝あさじて。たゞ古びてもアモ茶ぬ。卷十四。よ。いつの方も神佐備け  
る。香具山のほこねがま。薛生すでか。卷十二。今。神佐夫等。いなに  
をあらば。卷七。今。石上。かののかみ。神さぬ而。君ハ更。立。よあひ  
かけととそへ。○につ小ちうさびと。りよ。う。くとそく。う。う  
さびのう。は不の用。卷下。雜一。翁。さ。ふ。いき。う。いへ。ふ。をも  
絆。本よ秀く。りく。卷下。雜一。翁。さ。ふ。いき。う。いへ。ふ。をも  
会せて。見べし。

つうの語云。あら人  
の。大和。おまかりて。  
やど久く。かの。  
か。あひ。あて。けり。  
人の。津。う。月。ごろ。  
ちい。ふ。お。花。を。喫  
たり。や。と。ひ。て。け  
り。き。む。

法師。おまんの。ん。あらけ。人。やまや。に。まう。て。わ。ど。久。く。は  
て。の。ち。あひ。ち。て。け。く。る。人の。よ。く。う。月。ごろ。ひ。い。う。に。ぞ。花。ち  
さ。お。う。や。とい。ひ。て。け。く。れ。ざ。

○此。詞書。や。ふ。ー。に。ま。ん。の。ん。あ。ら。け。と。つ。づ。洞。ち。ば。化。考。の  
み。づ。う。は。家。集。み。ー。ま。な。く。べ。し。ち。に。あ。げ。う。ぬ。こ。せ

取。き。ば。ほ。集。み。て。ち。よ。う。な。き。り。づ。ご。と。か。り。と。つ。う。の  
ふ。い。ち。れ。よ。う。

す。く。ー。世。の。吉。野。乃。ふ。の。さ。く。ま。ま。く。雲。と。の。ミ。見。ま。づ。ひ。け。

○花。の。ま。く。う。な。ど。い。ち。ん。を。お。ろ。う。た。な。ち。う。雲。と。見。ゆ。う。な。り。古。今。上  
ま。く。う。ま。の。み。べ。よ。き。け。る。桜。木。雪。う。と。の。ミ。を。あ。や。ま。く。ね。く。る。歌。ど  
く。く。び。ん。な。り。

亭子院の。寺。合。ば。く。

○拾芥抄云。亭子院。寛平法皇御所。い。而。も。セ。東西洞院と。抄  
かい。も。宇多天皇の下。古。ま。せ。移。ひ。て。始。ハ。東。雀。院。よ。太。陽  
あ。す。又。亭子院を造。を。ゆ。て。そこ。よ。お。ち。佛。く。る。古  
か。ほ。帝。の。萬。事。と。亭子院。お。ち。か。ど。も。亭子院。よ。の。も。ナ。され

三。さては奇合を。延喜十三年の事なりと。古今集序種より

たり。

ふざくさむぬふ時もつひうも寒の雪をよそひける  
○一首の乞かくれとも不<sup>ナシ</sup>。す<sup>ミ</sup>上<sup>ミ</sup>國<sup>ミ</sup>あまむけ<sup>ミ</sup>ーも<sup>ミ</sup>一<sup>ミ</sup>の  
山のうひうり見るあくも。

乃一<sup>ナシ</sup>  
山<sup>ミ</sup>梅<sup>ミ</sup>を見て。

○山<sup>ミ</sup>の梅<sup>ミ</sup>を見てといふをなう。のよ<sup>ミ</sup>ハ。ほ<sup>ミ</sup>うつ<sup>ミ</sup>ーお<sup>ミ</sup>せ

かてもあべー。や<sup>ミ</sup>ぞ一本にち。山<sup>ミ</sup>乃<sup>ミ</sup>とあり。

葉<sup>ミ</sup>

ふくもとそくつるみをさくさまくすもちよや毛こと<sup>ミ</sup>なう

○古今下<sup>ミ</sup>國<sup>ミ</sup>あたがびく山のさくら花うつるさんとやひうもく

く。今<sup>ミ</sup>のむこと<sup>ミ</sup>ふなるもひへ。たう<sup>ミ</sup>ゆく。

だい<sup>ミ</sup>く

まく人<sup>ミ</sup>まく文

我<sup>ミ</sup>のうげともたのむ<sup>ミ</sup>友<sup>ミ</sup>乃<sup>ミ</sup>まれ立<sup>ミ</sup>うとくもなみ<sup>ミ</sup>ア<sup>ミ</sup>きくあ耶

○抄云。うげと教むハ身をかく<sup>ミ</sup>おく<sup>ミ</sup>と教むんなり。なまにち。教<sup>ミ</sup>

なまにちをくく<sup>ミ</sup>めとくふんを立て。波ハ立<sup>ミ</sup>よ<sup>ミ</sup>うとくもをく

く<sup>ミ</sup>なとく<sup>ミ</sup>めとく<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>。 はあ。うげとぞたのむとハ。友<sup>ミ</sup>友<sup>ミ</sup>友<sup>ミ</sup>の

む<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>などと。かくをく<sup>ミ</sup>にもあんうなども思ひけれど。又<sup>ミ</sup>

ど<sup>ミ</sup>よ。また<sup>ミ</sup>ふうきんをこゑするにも何<sup>ミ</sup>ざ<sup>ミ</sup>べー。六帖<sup>ミ</sup>よ<sup>ミ</sup>これ

のミやうげといたのむと波もたくま立<sup>ミ</sup>よ<sup>ミ</sup>き<sup>ミ</sup>の姫ね。椎<sup>ミ</sup>を巻<sup>ミ</sup>

司<sup>ミ</sup>さん<sup>ミ</sup>波<sup>ミ</sup>とたのみーまひ<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>むか<sup>ミ</sup>ま<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>に<sup>ミ</sup>なうに<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>む

など<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>該<sup>ミ</sup>あ<sup>ミ</sup>ー。 めやほす<sup>ミ</sup>ハ。伊勢家集<sup>ミ</sup>よ出<sup>ミ</sup>て。あづ<sup>ミ</sup>れ家<sup>ミ</sup>よ。益<sup>ミ</sup>

花見月と仰き。かくて月屏風などの繪をよみたるが承  
鑑し。さすをひくよくんはらうなり。我のうちとへ。母あづ  
いへ。なみふをくはなと。まのあくよ波の立見るさすの。あや  
ふげふるゆき。おえするをもうゆくいへるなまく。拾達夏  
風吉あれでさむうなく夜のを庭より門をばはをきうけるを  
あすなじとをぬく。めく。なまくよもぎく。なとさんを  
あすなじとをぬく。めく。なまくよもぎく。なとさんを  
○物云。寶るをあそびのうよともひふ。もや水の氣と山吹のうけろ  
ふとめりと仰る。然るべ。水よ氣の映つと。花の散移落と。洞同ト  
きにちくとからくいへるなり。かくさアホ。いさうなる。洞のよと  
友人の。に。雅よハ。きよ多きアガリ。こ  
きよよくんはべきこと歌う。

人のふたのみがくくなうけき。山ふきおちまつたるを。おき  
えよとてきしけ。

○若さうたうと。ちまかうと。歩あるをいへるなう。六脂ふ  
詞とまざた色ぬ。秋のうみ。小ち枝と。葉落と。おけ  
ふともある。

まねじうすなまく。雄乃き。むをくもくじ。山吹乃花  
○よそからうふ人。きく。え。おせだあへ。我が身たまくと  
もあくで。おふくのうなく。あうゆく。よと。なう。意。奇。なう。  
やよひをう。の。花のさかり。お道まか。きけるか。

○やよひをう。の。文。字ハ。例の。例の。例を。へ。きて。洞。まに  
かふあう。子。いへ。やよひを。か。り。を。月。を。う。わ。ど。と。

おき。花のまかわひえい。そもやよひのすなうといもんぢ  
めく。いつおころとゆふを。がろくいひおくおきなまきを。や  
よひをこうじとよき切て。おのえくとんはへし。まゆゑの。の  
文字を入れて。下へはく。まかわひとを美なま。ついでよえ。一年十  
きま。だなどりふを。やよひと游生なり。まきまどは衣更著  
きま。おとづりふ。宿の中にき。おとづりすゆ。もあきど。そまも  
とひよきの。ハ。深きゆゑ。あるすとく。う。経度大人も。  
おとづりたるすもあきど。まよくも只ひさだめきを。いひ  
いひづく。といもれたり。縣居大人の宿もあれど。むい。う  
あくと。おもきは。そく。不く。舉げき。おのきもいき。う考  
きも。おもひき。むい。あく。おがつなけき。今ハ。もく  
しつ。経度。も。弥生衣更着などの宿を。きを免て。おとづり。那  
きば。まく。不く。弥生付とかきたる本も。まく。他の月の名も。右  
のさす。おひな。ちや。宿を。そく。すく。まく。ことなまき。一  
ことなまき。一わく。おどろう。かく。まく。

僧正通照

きつとばきふさつけづかたておざう子よの佛お花たまの子  
○花を折きばきよられてほくゆゑか。立てゆふをまにて。三世法  
佛小まことうと云きなう。アことに。御靈の神祇のまみくなどの  
めく。途中なれど。おれて物せん使あきゆゑに。立あがまを。を。手  
ぶさかけるといひ。まをきに。きり云ふを。おハ。車<sup>カシジン</sup>。やうの佛小  
供も。まを。今ハ。たとおがうとゆふを。三世の佛ふと廣  
くいもれまを。たてかがうも。ふと思へ。たちながうと  
あく。きやうおきども。然らば。たてかがうハ。立てあるまにて。ま  
ゆきなれきなう。又たておがう。よと云うけたるに。ち。何も。ま  
ゆひあやすとく。まく。はあ。よ下。お向の右に。ま。ゆゑみと。ま  
ゆと。かへて。見きバ。もとわう。まく。ゆゑみと。まく  
ゆと。かへて。見き。まく。ゆゑみと。まく。ゆゑみと。まく

神樂歌よ。みづ垣の神のま代すりさとお祭をたゞきにとりて河を  
びくらもとわるをばあはよがさのすよ引うるを誤なし。神乐歌  
のよぶさハ。手草をうるしの供するなれど。よくよ引もあてもぬこと  
あり。手草ハ。古経拾遺す。古事記。磐屋戸の段よ。竹葉を手草とする  
云々哉あれぢなりと。師翁いもれど。

歌一らえ

5年人ちゆ

みか庭乃毛え。涼爽ねが言アふと勢残かけ失うて。さける者あミ  
○水ふうのふ緑の毛も又涼きね枝なり。ねよ掛きの花な通ぢ。ふと  
せをかきてともいへまぢ。せうも。水邊の花をうそるを端なく  
して。村ふと勢をうひてよ云わうなどハ。いきうやうありげか  
す。モーハ上の。山とうそとも波ふをも。波ふをも。波ふをも。などく。廻風の

繪などをよみるにあうとうとも思へど。うりてなれぢ。う  
きぐく。老を。うらなまともよも。花の。無て。腐く。おなまど。か  
きの約まり。うと。縣房大人いもれど。  
やよいの下。五十日をかあふ。三條右大臣。並輔朝臣の家にまかわ  
こゝりて。はるに。翁の。毛さけるやり。水のほどうふて。かきあれ  
お不そ詔さへけふついで尔。

○此詞由三條云大臣の。お文字ハ除くべき。つうひは小見  
え。化考の。みけ。の名ぢねば。やもあも。庭などかことふほくを  
て。あきよかなへ。流しや。或も使よきふすて。川の水を  
せ紡入て物一などもあらず。水アて。今世よいもゆる。象水な  
ア。幕本毫。紀伊。その中川の家の。さ方などて。よくんの  
らむなり。や。もう水と。ちよ。大。みきハ。大。津。酒。うち。酒

の事と清酒とよき。主とお。大嘗會の向酒黒酒などの神吉キ名キ

まく祓ひ。天皇の侍をのいやすらるべきを。祓ひても  
やごとなく人の前などにてち。人を祓ひて。おみまきとも

いふ事にもなつて。すとー。すべとよふ御の

ヨハ。上巻上ふ云り。

三條天大臣

かぎりおき名ふねよあらわ花なまばそあるくらぬ色の源さう  
○かぎりおき名ふねのうち。若を潤すよきて。左も。古へ清て。潤のみ  
縣彦大人もいぢれ。げふさもあ。べし。はゆ下は葉え主の。さを  
させど。你さもあ。ぬみちなき。どくよまれるも。全く潤すいひな  
しき。むす。行化の。お小もは。なだじひきし。又。今古。赤海道。三河国。販  
ふ者。門跡も。ちぶく人。さばさうりふても。又。か爲。郡などの人も。  
皆。ちをすみて。潤のめく唱ふ。なり。但し。ゆすまとも。清潤かよも。し  
て。和泉川。いつ見き。うなどのめく。いひか。も。身の。すく。あ  
ふ。な。潤とよふ。小腹で。りんを。かれど。すをも。かぎり。も。ねく。應ひも

あき。お深き。よつねと。も。さと。下句。そこひも。くぬ。くも。ゆ  
トの。ほ。ある。まい。奥。ゆう。き。よど。て。も。ある。う節。と。り。み。を。く  
み。ひ。そ。を。底。ひ。も。う。こ。と。い。ち。ん。と。て。上の。句。ち。か。ぎ。り。お。き。く。こ。と。ハ  
お。き。く。へ。お。か。る。極。し。名。す。よ。ハ。ま。ち。小。腹。お。つ。す。に。て。信。ち。ふ  
い。ち。・某。ト。名。ニ。付。テ。アル。其。名。ノ。通。ノ。と。よ。き。な。り。 潤。底。ひ。な。ど  
も。や。そ。み。の。よ。せ。な。り。 末。句。の。う。文。字。を。う。お。の。な。り。 は。す。お。お。小  
は。葱。蘿。も。山。家。の。巣。原。よ。て。冬。嗣。公。の。曾。孫。良。門。の。孫。左。中。特。利。基。の。子  
な。き。バ。か。ぎ。り。お。き。名。ふ。と。よ。み。ー。な。り。と。之。と。ど。そ。ひ。い。う。  
形。の。深。ふ。て。師。も。若。家。の。う。に。ち。か。ち。る。あ。ド。き。あ。な。う。と。い。れ。る  
也。

きぬうく小やひへこともあまめがまくらで思とすきゆのまあま

○立アカルてアカルもせで。りけアカルでもかくおもてとて。者のをもきゆくアカルほひし小やかんさやうに思もるをわ。者もをはひいのアカルきで。おもか風アカルばあど孫の詞アカル。此アカルのアカル一アカルぎひて。おもいみゆきアカルかよて。上のアカルおもかのをなとアカルはまな。

### まらゆえ

さ城させどふうさくらぬふうかきをば人アカルもあうトとくと  
○主人アカル差補アカル朝臣アカルたちもかへらアカルて。かくううきをアカル來アカルても。まぐりいと終アカルごろにて。たくゆうアカルきすアカルどもなまアカル實アカル小立アカルもかへらアカルてちく居アカルよと見ひゆアカルよや。又アカル勧アカルてあくまアカルひ詔アカルふみや。うち中アカルをバ。詔アカルもあう候アカルトと思アカルると形アカルべ。さそば

景アカルときハ。ちた生アカルともうせ小坊アカルれアカルる。又アカル是補アカル朝臣アカルの方アカルあらまアカルく。そハあざれども。ほ次のアカルあきぼアカルげ下アカルゆく水アカルきアカルこも。此アカルも。ともに賓アカルとアカルあちひのアカル信アカル持アカルのアカルまひアカルてよアねアカルするやうふす。又アカルよ。はまアカル是補アカルつよぬはきアカルたうて。あせアカルふす。ふす。下アカル報アカルふもつアカルれアカルが。おとにあアカルか。べきすアカルハ論アカルもなれアカルが。今アカルも空アカル居アカルをもアカルまやさんアカルあなどアカル小草アカル見て。はまアカルも空アカルはまアカル是補アカルと回アカルトアカルかぎアカルなたアカルみふくアカルへて。げふアカルあひアカルもあうぬとのアカルすアカルきアカルすにて。まのんアカルたアカルもあアカルれアカルぬ除アカルきアカルなきアカルば。その林アカルぐろアカルよ思アカルちアカル程アカルをバ。誰アカルてもあうねアカルと四アカルふうアカルふアカルても

あとうかなどアカルてあうび。まのびアカルおどアカルはるかアカルふアカルふ

けかくれぢ。まうりとすりて。まくぢあとふ。

○は詞ち以下の三首も。上と同體の事にて。まかわ  
とすりてのまかわハ。たゞ漏ちうする詞みてきになし。今世  
も。カリナラヌなどよふよめ。  
まつうひざまふて。少しいうづかし。

三絶句大旨

きのよゑー花のかよとく今朝るまきば。寐てこそさうにもまうりけま  
○あをき。女の宮儀などめくとりがて。一か寐て引つきば。又今朝  
ちあとくに色のまうりてそゆる事となく。紫か色ハ。まこと小  
朝ハ。まうりてそゆるものにもある。又女などめ。お別てハ宮儀の見  
方とぞする。やうに思ふとも人情のまうり。お人の窓の朝方見る  
ナハ。夕朝きよ。ほれも。月ぞ一歩ゆくやどに出ゆるあさけのはす

かくも。げふ人のきです。もんもあとわざなる時さか。めう。なども見え  
えう。花のうやも。舞風集。引すくあきいろもぬがへど花といへ  
どもと。歌うには。もだく。まうり。か。萬葉集。あく山のねのと。いを  
まわふあけく。まごと。花の歌を。見るがなど。行あ。

萬葉集

一  
か乃ミ詠て。——うへらば。君のをと。とく。いろ。君せん。や。君  
○寐て。あとくに。う。と。いふ。を。う。け。て。い。な。た。下。一。歌。を。か。う。寝。て。ゆ  
らん。との。ま。ま。や。う。歌。る。ら。寝。さ。か。て。き。を。も。ん。と。く。く。る。を。き。え。に  
べき。や。い。う。ざ。う。ん。と。く。る。を。き。ば。う。き。作。く。ん。と。人の。好。を。の。め  
く。よ。み。な。く。て。打。ち。た。ま。を。と。じ。き。う。す。お。よ。び。き。な。り。

新文

朝ぼくまで下山えあをあきけとて流うる花乃色ちろしけふ  
○げ小あいドのたすめく。一束うちかわるてうえまゆふも。流き流  
らゆきゆきど。主人のまよなへ。浅くぬほんまくびとくねゆふ  
ちうちゆきとすや。ア仍水ハ。おは表ふても。やまみがすにて。裏  
のまよへ。右大吉のかへ。まゆき珍ふるをいふなり。

あいづらば

よもんちよ

鶯乃ゑすとす。玉柳。玉柳。歌子すがり柳ちねのやア。う勢  
○催馬樂。玉柳。玉柳。行參よすうて嘗のめふて。筆を柳の毛。うきとく  
て。柳ち筆おゑよすとす。物なきば。吹歌。まきの真くを。風小令  
するなり。 みどりハ。令亂。といぢんぐめ。 玉柳。催馬樂。す砂の  
音小。

う。た。柳を。書。て。い。へ。る。な。り。

ゆくの花のちるを見て。

○は洞を。櫻の花の数くる本の下にて。などあいまたまやーきま  
くらは。あひをハ。ゑす。後の事なれどを。

みだり

○の方ふゑを。ぬらんさくらば。おもうげふの。いろ城尼船つ  
○抄云。さくらの時の舟を。かう船つて。○の方ふかくゑを。し。と  
なりといへ。室ふ壁。うと。ぬ。か。ど。も。なく。ぬ。ま。と。れ。ば。室。とも  
ぬ。ち。れ。ま。と。い。ふ。船。べ。一。続古今上喜小。萬家。の。一。ま。ぎ。ち。う。き  
こと。あ。い。ち。は。あ。に。よ。上。ゆ。ま。き。それ。ま。き。と。す。年。と。ぬ。き。衣。小。き。に  
あ。ば。う。の。花。か。う。き。け。と。ゆ。ふ。た。う。ひ。る。お。ま。ぶ。ま。な。も。

さて六帖よ。さうざんものとちかくは様ぞれおもづけふのま  
だきえりん。新勅撰事よ。おもうげ小毛のすぐをせざといく  
重き。まぬ峯のむすみとほなどハ。いまだ春をぞえざる様。人の思  
ひにて。春をそるあらわして。西朝ヨシマツよりきなり。ばあけも。  
あまの後よなうて。かかしまがろーなどのめく。そむくとぞうりを  
のかふえりん。かう。おもうげち。信。タハ目ニ  
かいへるそやのうにもりぬき方カタいへるかて。きひざ六帖。新勅  
と。

あれみのみこの。花見はる所不て。

○敷實親王ミノミコハ。宇多天皇のむすにおせり。

源中宣朝臣

ちよおと乃うきもちきであられよこと。残褐スルクモやどくはるふ  
○花の盛カクふうけ。きをそそき。あるすの夏きをばきて。あくまれ足  
事コトなあとやとり。あくまれとつ。感の御を。花よかけよること  
うねとなり。あくられ。そを嘗シテるゆゑに。あくはきと長大息ナガクことお  
そ。葉冲ハタケは師シ。様ふやどくとハ。おの上オよ空スカくすなり。

様のちるをそく。

よ子人チトベ

さうそ色にきたる衣アヒ乃涂スルアレアレすすむ自ジ日ヒもを一イけケもおし  
○古今ミサ上。様スル色に衣アヒも。うも。はて。若カタの。の。義ヨシなん。後ハタケの。かく。みにと  
ゆ。うち様スル色。ゆくそえて。しつき。ば。ぬく。ん。後ハタケも。若カタの。記念カタ。ハ。あ  
ふゆゑに。月日ツキヒの。よすも。さくも。を。かく。ば。と。なり。さて。古今ミサの  
の様スル色。後ハタケの。経スル。様スル重スル。お。よ。と。て。表アヒ。裏アヒ。赤アヒ。花アヒ。へ。る。と。き。ま。へ。る。

と縣居大人いぢき。ほ様もといへる。たゞ様の本乃をじといへる  
なまく。様色とも。まだそれの深きをいへるにちあつと。様井半  
秋翁もいぢれり。さき巴波すむも。古今同ドく。様の本乃色とい  
ふ事あらへ。

やよひかうよ月弓と。ほうきのころ。申文ふうへて。左  
大臣がよつうはへる。

○公事根源。京官除目。是ハ三月三日より先より行むるべま  
なれども。衆にある諸司を任らむ。左。衆などハナなど  
ち。縣名ハ。外官をむひと任せく。なり。外官とも。傳書の  
古ふてゆく。右。召ハ事の。右。縣名も秋翁。申文ハ。我  
なまく紀宣を。至三中。訴狀なまく。めぐる。申文ハ。我

葉之

あらうま。あまてりべき年。だても。まよかな。ばあづ。もが那

○高妻。三月子潤の。ゆる。君の。清高。よ餘か。ある。やう。お。もの。なう。

せえて。ちかく。餘か。はある。年になう。せ。清高の。妻。必遇。ち。ア。ほ

す。う。お。と。なう。後漢書。張純傳云。閏歲之餘。う。お。何。それ。よ。る。う。

か風。

左大臣

日<sup>六</sup>六<sup>始</sup>

つ。より。もの。と。け。か。底。ま。め。き。半。小。人の。あ。は。ざ。う。を。や。ち

○つ。首。の。と。ち。め。う。な。り。上。句。ハ。三。月。子。潤。の。ゆ。る。を。い。へ。本。乃。ミ

ホ。て。ほ。高。の。方。ば。と。へ。よ。き。か。け。う。を。下。句。よ。ひ。う。て。ほ。高。の。ゆ

を。た。と。て。の。ゆ。る。よ。な。り。上。よ。レ。へ。こ。が。ど。と。初。ニ。句。ハ。閏。月

の。あ。ゆ。ゑ。す。年の。年。ち。との。と。な。り。括。送。素。同。三。月。は。ゆ。る。洗

おもひふ。船。つゆさうものとけりつまふれどけのとくち  
きくさあひけ。

つう。船。つゆ。  
まう。まう。あひけ。  
あひけ。さ。紀。雲。さ。ハ。ふ。  
ことそ。そ。そ。そ。そ。  
でき。あそ。す。す。年。  
う。そ。ふ。く。り。ら。く。  
る。事。や。よ。ひ。の。つ。ご。  
し。う。ふ。つ。う。そ。け。

つゆにまう。でき。かよ。ひ。く。す。す。さ。は。る。す。び。き。し。く。ま。で。た。  
あひけ。そ。年。之。と。そ。う。わ。る。事。や。よ。ひ。の。ほ。ご。そ。う。小。つ。あ。  
そ。け。

○まう。でき。又。ま。で。き。と。も。ふ。  
まう。き。う。で。き。う。よ。ひ。ち。ま。う。う。よ。ひ。  
まう。き。う。で。き。う。よ。ひ。ち。ま。う。う。よ。ひ。  
で。と。ハ。よ。な。り。ほ。集。の。こ。ろ。の。な。う。ひ。よ。て。そ。卑。上。下。よ。か。  
まう。と。ソ。フ。リ。と。な。り。ま。う。ソ.  
上。年。を。か。も。い。へ。う。ダ。ご。と。し.  
そ。雪。年。の。事。ふ。な。う。くる。な。う。春。う。そ。事。よ。か。へ。ま。た。る。き。な。う。  
は。お。も。う。ハ。舟。隠。ふ。て。す。べ。て。ち。一。月。の。末。の。サ。六。月。こ。ろ。

まう。未。ま。す。冬。光。の。な。き。ひ。を。廣。く。つ。す。  
新古今人真答考  
妻。く。み。へ。ら。き。う。  
か。な。れ。ど。も。ほ。洞。ち。よ。い。一。ふ。う。全。く。晦。月。の。う。だ。う。あ。か。で。ち。  
す。そ。あ。き。う。

若原雅正

ち。あ。が。て。年。も。そ。れ。よ。き。な。う。く。そ。ま。き。く。く。よ。め。ぐ。に。く。う。艸。  
○。ま。よ。あ。が。く。ま。よ。ひ。な。う。を。ま。ま。よ。う。ハ。私。み。を。称。す。一。向。よ。対。面。  
も。せ。ば。して。今。年。の。事。ふ。な。う。そ。お。事。も。ま。ま。む。お。く。く。て。今。日。一。月。ふ。  
な。う。くる。よ。か。な。さ。く。く。わ。な。う。ば。ま。く。一。き。よ。と。な。う。  
よ。ホ。ア。コ。ラ。ス。花。を。も。え。め。や。ま。人。の。お。ぬ。物。ゆ。ゑ。す。を。一。き。ま。う。の。お。  
○。君。と。共。い。花。を。も。思。ん。と。行。る。に。そ。の。君。の。か。や。う。に。お。み。け。の。お。  
物。の。う。せ。も。お。け。せ。お。ま。の。事。り。く。も。さ。ー。も。そ。ー。ハ。ある。ぬ。ト

まゆすなは城。お下喜びくとをきくと只もくとすうかとあ。未  
ぬまのゆゑすち。信ふ。來モセヌモノギヤニトウキナリ。古今上  
國人もうぬまのゆゑ小學乃は門の本をきてくるう。

五

つゆま

まほかとまねでふきをめらるもまほかま。訪まれて日ごろを経  
○おきまでもまく出合ひるもまくばりま。訪まれて日ごろを経  
が。拂くとのく届く話て。時刻のうつるをもまくばるますよりよとね  
る。たまかき時もとえて。朝夕の時刻のうつるにじ。さて時刻  
のうつるをもわきまへまとて。毎日おきて。すま喜子本くるあと残  
もおきするなり。 桃よ。白氏文集よ。紫藤花下漸黄昏と。向のを  
みて。たまうれよ。おをよみ合され。一ひまくとあひづら一とき。た

うきとも。夕方のやめぐまき時。涙が彼をと。夕のるまき  
取きうりよ。何なり。後せよ。る文字を湯ても呴ぐも。非なり。され  
ど。お集よ。ハ。君すだまゆうで。廻ぬきへ。夜。たまうと。紀もまくば  
ぞきけると。何るにうりて。見えば。喪中のゆとすゆ。 ます。お集六帖  
などの生方かても。二句の詞。取西朝也。とひぐく紀節あるて。んわ  
らべも。訪も。をさるやうふすえ。次の。おおきも。たまくぬきすに。す  
ゆきが。とくと。詞す。ふさはるすはて。とめこそて。たまうに。そこと  
かく。お一ざる。おふ対ひきての畏ふても。有くんう。

や廻むぐるのうち。と。うけまき。おまくす。ゆうん坐立も勢が  
○薄の門。など。をと。うけまき。ゆうん坐立も勢が。  
例の事のめく。君の件ふり。べきんもせびとめ。す。上の。とも。小こ  
そ花をも見めと。うと云ふ。小こへらをとるなり。や。薄。や。楊。な  
どの。や。へ。ち。沐。ま

のまふて。繋くまをもすなり。ハキとももも。ハモサの借字かて。八字  
めま子あづうるふもあらば。絶えまし。同よ一へのまじのまのやへ  
様よ九室や。かひぬるうれといへ。朝も。ハミ九室とかけ合せ  
たるアハあきど。ともも絶のうへのうけ合のいみて。ミハ打詠毛のを  
がく。呂ひまが  
ふべううだ。

### 題不痴

ちゑ人志庭

日の伊勢お宿

き一免ども妻のかぎりがゆのまへ夕景不そくならけふの難  
○三日晦日は夕方めあなり。乞うめうむ。

### みつゆ

ゆくさたきし一みー妻めあまうハまふー方にもなまぬべきつね  
○妻のままでりくを惜まくと見て居るうちか。妻を既小暮竟クレバテされど。晴  
日うちの往来へ房で。せ今までを一にたる妻の来キタる方になら。へ  
きずうれとなり。妻の来キタる方とハ秋葉などの手にものせども。そ

きを道踏などのぬくよいひなーるなり。今妻の尾を色離シラフまぢ。  
時日よりうち又ほん妻の首の方に引ぬまんとゆめやうめきめ  
足。二句。妻めの文ふみ文字ハ用語の如シテて。信ちよ。がとゆシテみなり。此  
さざる。うづきふシテきなきども。ふとんはあやまシテときも。さうに  
らぬぐシテきうちシテきて解説シテんとす。にも。ひそもういひとり解説  
まシテかくうやうくやと。うづくシテくもいへ。うづ。又母シテ乃意。  
今日よどち。娘めのこすシテゆく解説シテありて。きシテナシテ妻の内シテくらむ。娘  
すゆどとも。なや娘めのこすシテあシテき。

やふひのほどり。

○ほ絶ゆハ。絶ゆ尔文字を廻せるとあくねう。ほどどりにて  
あそげあく西なり。

### 貫之

ゆくさたかなりとやするとたのミーをまおうぎよ。ハトメアドモリ

○いままことにぬ時をかくする一吟先生の事小字と題しを。  
そのたのきる事もあても。さざんゆきやもあくて。春の日敷乃  
限も。今日にてあるよりよとなり。かくて。はあ詞の表の。なると。よ  
きハ行先が變る。何時より更るなど云。一時より移變をひふ詞ふて。さて  
裏のをふて。身の界進むるを。成出とも。たるとのも云。この詞  
小さうさて。ほきなどハ。此身の事と頼しものを。も財産の事ハ。  
けふ限かである事よと。なげとをうけて。なし。二三句おさ  
アホど。必ずえとす語を。く思ひ。二月も。同召ある月なれ  
ざなり。

お／あ／お／お／は／ま／の／お／く／ん／と／も／け／ま／な／げ／う／ま／

○お／一／河／バ／ト／ソ／句／下／句／を／へ／う／け／て／ら／は／べ／一／首／お／き／ハ／吟  
う／な／う／曾／丹／集／國／の／香／の／ね／す／一／と／き／の／め／バ／く／そ／ま／を／も／残  
一／は／だ／ま／。後／拾／送／喜／樹／尽／ま／紙／お／義／う／何／よ／す／事／を／ば／人の／を  
お／む／と／う／ふ／な／ど／何／を／も／引／合／せ／そ／く／。

美游絲

うれて又あすとゞになま事ひ日を花乃庭にてりよもくさん  
○喜び口をも。喜の口をも。のをと。よきなり。花のうげふてのも  
も。様子はうきい。度々喜々く花をよなげ。古今集の事。紹和  
も。さうとよ。又ちかむとのいよ。えり。何ちよ様とひとこと。も。  
さうで。を。おとよ。う。度々瓦花をよめ。うりと。葵冲阿闍梨  
も。顯所大人もいもきう。能きが。は。余ま  
ふをも。かきよ。おぞりへて。ち。べき。うち。

三月の法ごもり日。ひさ／＼ままでおぬ／＼ひひて。伏ふみ  
つうの法。や。よひ  
のほどもうの日。人  
の件から／＼ま

でこぬ  
でけゆる  
のれく  
ひや  
まつげ

のれくに。まつけゆる。

○まうでこねりへ。そーくまもぬとよすなり。

景ゆき

又もさん時々や思へどきのされぬ我身やあせばきまもうれ  
○ゆふる。事も又是年ハ事べきみどりとハ思へども。我身の存命ナガラヘ  
ゆふるの頼アモウバ。今日まづりゆが。そくく思ふくやうめとれ  
ど。打与ふ。初二句小まづても。又もゑゆへきみどりと思  
どもとゆきをふくえちにもゆくし。かくゆく付。上二句も。  
など人の方と表裏カタシモ。二句以下ハ表裏カタシモ初二のを一つ  
小文ていへふなり。

貫カクさかくそれかドドになん身マツルよかわゆり。

○ほ左近ハ撰者アソブモノのけ、えよりも加へられることとく。又も  
法人のちかくたてう。山ヤマとふツブともまざりびな。また貫  
え主ハ天慶九年卒と。撰者数スムシヨウ小豆マメうち。

